

ツアー登山参加者について (4月12日付け mail)

こんばんは 掲載おねがいします。

ツアー登山参加者に対しては、パーティのメンバーとしてあるまじき実態が言われ、問題視されています。そして特別委員会の報告書では「ツアー登山といえども登山であり参加者にパーティのメンバーとしての自覚を促す必要がある。」と主張している。

『ほとんどのお客さんは、あくまで「客」として来ている意識の人が多く、知らない人の寄せ集めであり、会社に連れて行ってもらっている、という意識は明らかにあります。お互いの結びつきもない、単なる集合体であり、それはパーティとは呼べず、個々が個々のために歩いているだけのことであり、会社側もその結びつきに対してどうのこうのは言いません。』(シンポジウム 山形昌広氏 3枚目の最後) 私が今回のツアー登山で北沼分岐につくまでの姿はまさに「個々が個々のために歩いているだけ」であると思います。(私の記録P9～12参照)

「最近増えている募集登山やツアー登山の危険性のひとつは、山岳会の山行であれば通常得られる他の会員からの経験、技術、情報の伝達や、山行中の援助、補助をうけることがなく山行が実施されるという点です。そこでは、参加者相互の援助協力関係を期待できず、引率者と参加者との直接的な援助関係しかないのが、それが不十分な場合には直ちに事故に直結する危険があります。また、営業的ツアー登山では、遭難事故が起こっても救助活動を引率者にまかせ、他の参加者は先に帰宅することが多いと思われ十分な救助活動を期待できません。」(溝手靖史 登山の法律学 P144)

「仲間同士の登山では、原則としてリーダーに参加者に対する安全配慮義務が生じないとしても、参加者相互の間に委任契約、準委任契約もしくはそれに類似した契約関係があると考えられ、それによって一定の義務が発生します。」(同P49)その一定の義務として「互いに援助協力するよう努める義務」があげられている。「パーティは参加者が互いに援助協力することを目的として結成されるので、この義務は当然のことです」(しかし「これは努力義務であり、これに違反したからといって法的責任は生じません。」ともいわれている。)(同P50)

ツアー登山では参加者相互の間に委任契約、準委任契約もしくはそれに類

似した契約関係があるのだろうか。これについて溝手氏ははっきり述べられていません。私は次のように考えます。

仲間同士の登山ではパーティを組んで登山しようとする事自体に委任契約締結の意思を認めるのだと思う。仲間同士はそれこそ自己責任で山に行くのだから、リーダーをはじめとした役割分担を決め、準備し、どこへ行くか、天気は、地図は、交通手段は、何が必要か、時間管理、場所確認すべて自己責任でやるしかない。そこにおのずと互いの間の委任関係ができるのだと思う。

しかしツアー登山ではガイドという圧倒的に優越した権限と義務と能力を持った（あるいは持つと期待された）人があらかじめ決められているのである。参加者の出る幕はほとんどないと思います。むしろ参加者が口を挟まないほうがスムーズに行くのだと思います。（要らんことを言うな）コミュニケーションについてもガイドの優越的地位があるので、参加者は参加者相互の間にはあまり必要ではないと思っています。たとえ一人がこれではいけないと思って努力してみても、参加者全体がそう思っている以上どうしようもないと思います。

参加者相互の間には委任関係を認めることはできないと思います。ガイドという優越的存在が独占するので、参加者のすべき任務がないから、パーティのメンバーであるという自覚はできないと思います。そういう実態を踏まえて意思解釈をするのだから委任関係を認定することはできないと思います。ツアー登山参加者に共通する行状からもそう思います。つまりこうすべきだということから解釈をしてはならないのであって、当事者がどうすると思っているのかという意思の推測によって解釈をするのだと思います。だから委任関係はない。ゆえに互いに援助協力する義務は（それが努力義務にすぎないとしても）ないと思います。あるとすればそれこそ道徳的な困っている人を助けてあげたいという気持ちだけだと思います。この辺りのことは別の見解があるかと思いますが、委任関係はないと思います。

私について言えばおよそ他の参加者と協力して積極的に何かをなすということは考えてもいかなかった。万が一に備えて常々協力しておくんだといわれても、違和感を覚える。ガイドのやっていることを一部引き受けるのだろうか。ガイドに何か協力することがありますかと申し出るのだろうか。110番をガイドの変わりに引き受けるということはあったと思います。

しかしガイドが決めるのだから、ガイドから依頼されてからでしょう。私の考えていることはむしろガイドに対して、他の参加者の意見や状態を言って対策を求めることです。ガイドは仲間のリーダーという感じではない。仲間のリーダーだったら、リーダーに協力すると思う。仕事で来ている人とお客は違うと思う。ガイドが「お客様だ」というなら、参加者は「仕事だろう、プロだろう」ということです。(なお他の生還者とはいままで連絡は取っていません。取りたい、聞きたいと思っていますが、相手にまかしています。連絡はありません。ツアーの場合はその場限りのものだから、そういうものです。)

そしてツアー登山の参加者の行状は、ツアー登山という制度自体からくるのであって、ツアー登山をやる以上は常に出てくると思います。メンバーとしての意識を持たせるといっても不可能だと思います。コミュニケーションを持ってといってもできないと思います。制度自体からくる問題だから制度自体を変えないとできないと思います。個々の参加者の質の問題ではないと思います。個々の参加者を非難しても始まらないと思います。ツアー登山者に対してはいろいろな要望が言われている。(調査報告書P47)しかし私はツアー登山の制度を変えないとできないと思います。調査委員会の人たちもそう思っていると思いますがどうでしょう。会社のほうは形式的に色々いうだろうけれど、形骸化するだろうとおもいます。

ツアー登山も登山であるからといわれている。しかしツアーであるということもいえると思います。法的な意味において旅行と登山に質的な違いがあるわけではないと思います。違いはガイドがいるのか、仲間だけなのかの違いだと思います。ツアー旅行もツアー登山も同じだと思います。仲間だけの旅行と仲間だけの登山は同じです。存在が意識を規定するのだから、ツアー登山の参加者が客意識を持つのは仕方がないと思います。それは制度としてのツアーの問題だと思います。登山だからといって参加者としての意識の質的な変化ができるわけではないと思います。

私としてはなぜこれほどの非難がされるのかがよくわからない。わからないのはパーティの経験がないからだと思う。私は普通のツアー登山者として行動してきたつもりであるが、それが非難的になっているように思います。少しおかしい、何かおかしいと思う。私はもうツアー登山は利用したくないと思います。こんなことを言われるのでごめんこうむりたいと思います。ツアー登山の参加者を批判する人はツアー登山を利用したいとは

思わないようである。それはツアー登山自体がおかしいと思っているからだと思います。自分が参加したとしても他の参加者とコミュニケーションをとったり、見ず知らずの参加者と協力関係を作ったりできる自信がないのだらうと思います。「ばらばらの登山者」である自分を発見するだけだと思います。そういう自分を見たくないのだと思います。

新しいツアー参加者がどんどん出てくるのは避けられないと思います。需要が有る以上避けられないでしょう。そしてツアー登山は禁止せよと悲憤慷慨すればいいでしょう。なお昨年の北アルプスでは事故の影響でかえってツアー登山客が増えたといえます。不思議なものです。

私がツアー登山の客の立場から抜け出そうとしたのは北沼分岐で一人の参加者の危機を見たからである。しかしそれはすでに遅かったのだと思う。何もできなかった。一部の人からは要らんことをしたと恨まれている。私もよくわからない。また私がマスコミなどにしゃべったことに対しても、登山ではリーダーを非難しないのが鉄則である、登山は自己責任でやるべきで、他人を非難するべきではないという意見がある。

最後にツアー登山のあるべき姿は企画じたいにあるのだとおもいます。ガイドのミスを織り込んだ計画だけをやればいいのです。ガイドが天候判断をミスすると瓦解するような計画は立てないことだと思います。「天候やガイドの能力に関係なく、安全性を確保できるように設計、企画すべきである。」(シンポジウム 溝手P70) スワンさんも同じようなこと言っている。他の会社が安全性の問題から手を引いたところにまで、手を広げすぎたのだと思います。